

私の保育



折原祥子

いつも思うこと……

私が子どもたちと過ごす毎日の中で常に考えることは、本当に良い保育とは何だろう、保育者とはどうあるべきか、ということである。子どもたちに、創造性豊かな、自分らしさのある人間になってほしいと願い、そのためには自分たち保育者は何をしたら良いのかを真剣に考える。

子どもたちひとりひとりの持っているものを、園の生活の中で、できるだけ出せる環境をつくり、その中で多くのものに触れ、経験し、自分なりに感じていってくれることが一番良いと、自分なりに思っている。私は、その生活の場に加わり、子どもたちと共に多くのものに触れ、喜び、感じていける者でありたいとも思っている。いろいろな経験から考えると、保育者が興味があるり、真剣に取りくみ、おもしろいと感じることは、子どもたちに

とっても、良い経験となることが多い。……というのは、生活の中から自然に感じとられるものが、子どもにとって、最も大切ななのではないだろうか。

子どもたちに、創造性のある人間になつてほしいと願えば、毎日子どもに接する親も、保育者も、創造性のある人間でありたい。また自分らしさをもつた人間でもありたいと思う。

わが幼稚園……

わが園は、九十六人の園児と、五人の保育者が毎日一緒に生活している。一つの大きな家庭のように、三歳児、四歳児、五歳児が混ざりあって遊び、年齢にあつた活動をしている。五人の保育者の中に、保育専門でない、染色、織物を専門とする者が一人いるのも、わが園の特徴であろう。

子どもたちに対する目の向け方も、自分の仕事の方向から……

というのも、我々保育専門の者にとっては勉強になることが多い。我々はつい本の上で、また少しばかりの経験から、あたかもわかつたような顔で子どもに接することが多いと思う。しかし、物をつくり出すことを専門にしている者は違う。他人と決して同じものではない、自分にしかできないものをつくり出していく、その

苦しさ、喜びを常に経験しているからである。

そのような物の考え方で子どもに接した時、子どもたちの心中にも、何か感じるものがあるのではないかと思う。

物をつくる……

そこで、物をつくるということを考えてみたい。

私たちは今日、物質的に非常に恵まれた環境の中に置かれ、自分自身の手で生み出さなくとも、生活していく上に必要なものはすべて手に入れることができる。その上、自分の好みによって選択できるほどのいろいろなものが氾濫している。かつて、生活上必要なものは、すべてつくるなければならなかつた時代を思い起してみると、選択するだけに慣れてしまつた人間から見たら、「大変だった」の一言で片づけられてしまうだろう。厳しい自然の中でも、生を維持するために、衣・食・住と人間が生きていける環境を、自らつくり出さなくてはならない。それはむしろ、せね

ば生きていけないというものだつた。しかしその中で、厳しさ以上に、創造する楽しさ、喜びを味わっていたにちがいないと思う。

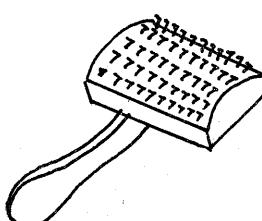
一つの経験……

子どもたちと一緒に、一つの楽しい経験として、小さな布を作つてみたいと思い、原毛を用意する。羊の毛を刈り、洗い、何色かに染めたものだ。

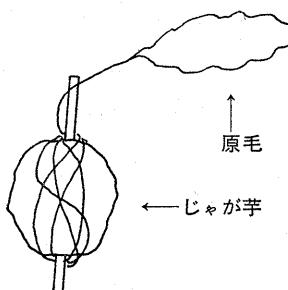
「これなあに?」「羊さんからもらつたのよ」、色がついているので、あまりピンとこないらしい。羊の毛を染めたことを話す。すると頬にあてて、「あつたかい。ふわふわ」と言った。みんなで日だまりに毛をもつて行って、手でほぐす。三歳の子どもも、四歳の子どもも混じっている。時々、フンの固まりや木の実なども混ざっていて楽しい。色を混ぜることと、纖維の流れをそらえるために、カード(次頁図I参照)をかける。針のたくさん出ている木製のもので、針をひっかけることにより毛をそろえていくのである。そして撲りをかけて、糸にするのである。最初、カードの工程までしたものを子どもたちに与えて、遠心力を利用するため、こまやりんご、ジャガ芋の中心に箸を通して通したものを使い、撲りかけから始める。(図II)片手でジャガ芋をくるくる廻しながら、廻

つている間に毛を送つて、撫りをかけて、糸にするのである。回転しているジャガ芋に、毛を送るタイミングはとてもむずかしい。回転が弱いと、毛を送つても撫りが甘く、糸はジャガ芋の重さにたえかねて切れてしまう。ジャガ芋も当然落ちてころがつてしまふ。そのタイミングをつかむには、やってみて、自分でつかみ取らなければならぬものだ。ジャガ芋を廻してあげて、毛を送ることだけを子どもたちが最初した。やはり、少しづか毛を送らないで、ブツンと切れたり、毛を送らないうちに、撫りが上がってきて、持っていた毛全部がねじれたり……。しかしその繰り返しの中から、少しずつ、タイミングをつかみ始めていった。子どもたちは、「不思議、不思議」と言いながら、手元から不思議にも糸が生まれて来る楽しさを味わつた。

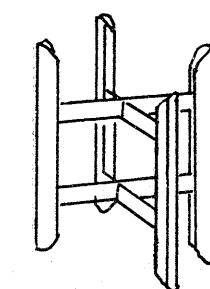
それから、幼稚園の隅で、思い出した子どもたちが集まつて、糸づくりを続ける。一人でジャガ芋を廻せるようになった子どもも出て来る。今迄、先生に廻してもらつていた子どもも、友だちと廻しつこしたり、自分の好きな色の原毛を選んで、「混せて」と言つて、持つてくるようになつてきた。混ぜると「わあ、きれいだ」と喜び、またジャガ芋をくるくる。そのうち、カードをつかつて、自分で混ぜたくなつた子どもも出ってきた。しかし、これはむずかしい。カードをうまくかけなければ、毛を送つても、糸に



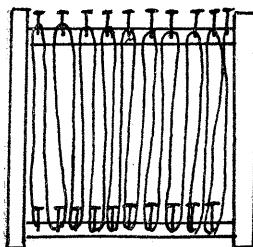
I



II



III



IV

なつてつながらない。そんなことはこちらがわかるだけで、色を

混ぜることを楽しんでいる。子どもが混ぜたものを、最後にもう一度カーデしてあげるとうまくいく。

一週間位過ぎ、糸もずいぶんできたので、布にしようといふことになつた。ひとりの男の子が、「お姉ちゃんのスカートつくつ

てあげるんだ」と言つた。残念なことに、糸はそんなに沢山はない。

つくつた糸を木枠に巻き取つて、撚りどめのために、糸を蒸さなくてはならない。(図III)子どもたちは、ジャガ芋も一緒に蒸すと思つたらしい。「先生、ジャガ芋食べられるね?」使われていたジャガ芋は、乾燥してしわしわになり、食べられそうもない。

結局、糸と一緒に四本のさつまいもを蒸すことになった。三十分後、みんなの興味はさつまいもに移つた。四本を三十七人に分けなくてはならない。木綿の糸を持ってきて、一方を口にくわえ、小さな輪切りにする。「どうして切れるのかな?」と不思議がる。「このおいも、糸の味がする」とある子どもが言つた。

木のワクを作つて、縦糸を張らなくてはならない。何人かの子どもたちが先生と一緒に、木で、縦三十五センチ、横二十五センチ位のワクをつくり、縦に糸がはれるように釘を打つ。(図IV)蒸した糸を釘にかけ、一本ずつ交互に縦糸をすくい、平織に横糸を

入れていく。そして櫛で打ち込む。

スカートまではいかなかつたが、縦三十センチ、横二十センチの、どこにもないすてきなツイードの布ができた。

さいじこ……

これは、わが園だからできた経験だったと思う。私たちの中では、専門家を除いては全員始めての経験だった。子どもたちに負けではないと、家に持ちかえり、一生懸命練習した先生もあつた。それでも子どもの方が早く要領を覚えて、その手つきの良さに感心させられたり。子どもと競争で糸つくりを覚えた。我々もとても楽しかつた。

子どもたちは、この経験をどう受け止めただろう。織物という糸を使って物を作つていく中で、必ず小さな可能性を見つけ、またそれに自分をぶつける。そしてその中から……といふくり返しで、物を作つている……という一人の保育者が園にいたからできたのだと思う。子どもたちも、いつか、何かの時に思い出すことだろう。ジャガ芋を見た時……羊を見た時。それぞれ経験した時に、強く印象に残つていることを。

これからも、我が園ならでは……という個性のある保育を行きたいと思っている。

(松が丘幼稚園)